

外国人の人権尊重に関する実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

広島県

○学校名

広島県立庄原特別支援学校

○学校のURL

<http://www.shobara-sh.hiroshima-c.ed.jp>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】 0 学級、【特別支援学級】 21 学級、【合計】 21 学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】 84 人（平成28年5月1日現在）
（内訳：小学部 20 名，中学部 19 名，高等部 45 名）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

特記事項なし

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

一人一人の特性に応じた教育を行い，その可能性を最大に伸ばし，社会参加や自立につながる生きる力を育てる。

【人権教育に関する目標】

人との関わりの中で，他者を尊重する心をもつ子供を育てる。

○人権教育に係る取組一口メモ

日本とシンガポール両国の特別支援学校間で国際交流に継続的に取り組み，異文化を理解し，多様性を受け入れようとする態度を育てる教育活動を学校全体で組織的に進めている。

○人権教育にかかる取組の全体概要

平成24年からシンガポールにある特別支援学校2校と姉妹校提携を結び，国際交流を進めている。シンガポールから訪日しての庄原での伝統芸能やスポーツや食文化交流，シンガポールへの短期留學生徒の派遣，ビデオチャットを通じた日常的な交流，iPadアプリを活用しての情報交換，国際交流に関する総合的な学習の時間の授業等，組織的に様々な取組を進めることで，コミュニケーション技能を高めながら異文化への理解を深め，多様性を受容しようとする態度や主体的に課題を解決しようとする態度等を育てるなど，高い成果を上げている。

3. 実践事例の内容

実践事例：シンガポール姉妹校との交流活動

○取組の目的

グローバル社会に対応できる幅広い視野をもち、主体的に行動するコミュニケーション能力を身に付けた児童生徒を育成するために、具体的な実体験を通して、国際性を高めさせるとともに、日本の歴史・伝統・文化等を理解・尊重する日本人としての自覚を高めさせる。また、国際関係や異文化に対して理解を示すだけでなく、国際社会の一員としての自己を確立し、持続可能な社会及び未来を担う人づくりを図ることを目的とする。

○取組を始めたきっかけ

上記の目的で児童生徒の育成を図っていくことは、特別支援学校においても重要であるにとらえ、本校でも海外交流に取り組むこととした。その際、授業研究等で指導助言を受けている大学と連携を行う中で、本校の学校規模等に適したシンガポールの特別支援学校2校を御紹介いただき、その2校と姉妹校提携を結び、交流を始めた。

○取組の特色

一部の生徒による短期留学等を行っているが、全員の生徒が姉妹校を直接訪問することは難しい、という現状をふまえた、すべての生徒が主体的に関わっていくための特別支援学校としての国際交流の在り方のモデルとなっている。その取組の具体的な特色は次の3点が挙げられる。

- ①取組の可視化
- ②取組の日常化
- ③取組の間接体験化

この3点の特色から、取組の内容を整理し、以下に紹介する。

○取組の内容

◆姉妹校提携先：国 名：シンガポール共和国

学校名：Towner Gardens School

Fernvale Gardens School

※2校ともシンガポールの特別支援学校

◆フラットスタンレー活動【取組の可視化】【取組の間接体験化】

- ①各校互いに、自分の分身となるフラットスタンレーを各児童生徒が作成する。
- ②相手姉妹校に本校の児童生徒が作成した相手のフラットスタンレーを送る。
- ③相手姉妹校から児童生徒が作成した相手のフラットスタンレーが届く。
- ④互いの修学旅行や家族写真等を利用し、国内の様々な名所や文化等がわかる場所やイベント等で相手姉妹校の児童生徒が作成したフラットスタンレーとともに写真を撮る。
- ⑤撮った写真を交換し合う。

⑥フラットスタンレーとともに写真を撮った地域の文化等の学習を事前又は事後に行い、そのまとめられた資料を共に交流し合う。

◆ビデオチャット活動【取組の日常化】【取組の間接体験化】

- ①相手姉妹校と日時や交流内容を調整・設定する。
 - ②機器等の事前準備・チェックを行う。
 - ③相手姉妹校と教職員間で事前のリハーサルを行う。
 - ④児童生徒間でビデオチャットに取り組む。
- ※月1回のペースで実施予定である。

◆i Padアプリ (Edmodo) を活用しての情報交換等【取組の日常化】

- ①各校で、i Padにアプリ (Edmodo) をダウンロードする。
- ②お互いのアカウントを教員が作成し、同じグループ内に登録し合う。
- ③電子メールのように連絡を簡単に取り合えるようにする。
- ④動画や画像・写真を添付し、フラットスタンレー活動の様子や各校のニュース、学習活動等の児童生徒の様子を交流し合う。

◆年賀状による交流【取組の可視化】

- ①全学部姉妹校への年賀状募集の案内をする。
- ②希望学級で年賀状を作成する。
- ③年賀状を集める。
- ④12月中に姉妹校へ年賀状を郵送する。

◆国際交流についての授業【取組の日常化】

目標：外国の文化に関わって、自分の意見を言ったり、相手の意見を聴いたり、お互いの意見をまとめたりすることで、コミュニケーション技能を高めるとともに、自他の理解を深めて、多様性を受容する態度を育てる。

内容：姉妹校のあるシンガポールと日本・広島文化を比較できる情報を調べ学習によって収集し、その情報の中からクイズを作る。さらに、調べた情報と作成したクイズを用いて壁新聞を作成する。姉妹校との交流をどのような形で行うことができるのかを考える中で、姉妹校のことを知ると同時に、自分たちのことを知ることが交流のスタートとして必要だと気付かせる。相手のことを知るには、そして自分たちのことを知るためにはどうすれば良いのか、を考える中で、まず相手の国と自分の国の文化や風土について比較し、違いを知ることが必要だということから出発する。

効果：単元全体の学習活動を通して、異文化について理解を深めることが期待でき、同時に、自己理解をも深め、自らへの自信も高めることができる。また、クイズ作成のための話し合いの中で、課題解決のため、自ら考える力、主体的に判断する力はもちろん、共感力などのコミュニケーションの力も高めることができる。また、日常的な授業に国際交流の内容を組み込むことで、他の取組との関連を図り、国際交流の取組全体の日常化を進めることができる。

○取組の主体や実施体制

代表者：校長

副代表者：教頭

全体調整：担当教諭

相手校との連絡・調整・メール送受信，通訳：高等部担当教諭

校内掲示等，ホームページ掲載，Edmodo関係：小学部担当教諭

フラットスタンレー活動関係，相手校への郵送関係，ビデオチャット関係：中学部担当教諭

○取組を実現するに当たって講じた工夫

◆フラットスタンレー活動

・校内だけではなく，地域の特色ある名所や文化が分かる場所・イベント等で写真を撮り，交換し合う。

◆i Pad アプリ（Edmodo）を活用しての情報交換等

・翻訳アプリ等を活用しながら，児童生徒間での情報交換等の交流ができるようにする。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

○取組を実施する際に生じた課題

ビデオチャット等の交流を実施するに当たっては，相手校との綿密な事前連携や授業実施の際に英会話の指導等の指導者側の英語力が必要である。また，情報機器を活用した活動に係っても，その指導力が必要である。しかし，それらの内容を熟知し指導できる職員が不足しており，その人材育成が課題である。

○課題に対する解決方法

今年度から校務分掌に「情報教育部」を設け，海外交流に係る業務を担当することとした。海外交流の実施に当たっては分掌担当者や授業者が連携を図ったり，複数の指導者で対応したりするなど，海外交流の内容やその指導について，継承・発展させることができるように，OJTによる人材育成を図っている。

5. 実践事例の実績、実施による効果

○取組の実績

平成24～28年の5年間，海外交流推進事業として交流を継続している。

○取組が効果を上げた実際の事例

◆フラットスタンレー活動

・実際には本人は行くことができないが，自分の分身のフラットスタンレーが行き，また証拠写真も残るので，交流先の児童生徒と共に擬似的な海外旅行を体験できた。また，その地域の文化等も学ぶことができた。

・電子メールのやり取りも考えられるが，あえて郵便で交換することで，国際郵便についても学習することができた。

◆ビデオチャット交流

- ・様々な交流をリアルタイムで行うことができた。
- ・録画された動画での交流は難しい。相手姉妹校の児童生徒の反応や本校の児童生徒の反応等も交流が可能である。

◆i Padアプリ (Edmodo) を活用しての情報交換等

- ・i Padアプリを活用することで、電子メールでのやり取りでは難しい動画のやり取りができた。また、簡単に持ち運ぶことができるため、送られた情報や動画・画像・写真などを、場所を問わず児童生徒に伝えることができた。

◆年賀状による交流

- ・Air Mailの書き方を知ることができた。
- ・年賀状を通して、日本の習慣を学習すると同時に、姉妹校との交流も行うことができた。
- ・後日、姉妹校から年賀状をもった写真が届くことにより、海外にも手紙が届くことを体験することができた。

◆作品を通じた交流

日本とシンガポールとの文化を通じた交流の一環として、シンガポール姉妹校からたくさんの作品を送っていただいた。本校からも日本の折り紙を送ったり、日本のことわざを英訳し紹介したりするなど、異文化交流活動を実施することができた。

◆食文化を通じた交流

シンガポール姉妹校から菓子等に使われる「ベサン粉」を送って頂いたことから、総合的な学習の時間において、その調理方法の学習を行い、シンガポールの食文化に触れた。また、日本からも「お好み焼き」を紹介し、両国の食文化を通じた交流活動を実施することができた。

6. 実践事例についての評価

○取組についての評価、及びそう評価する理由

取組開始から5年目となり、学校の活動として定着し、生徒にとって貴重な学習の機会となっていると評価できる。

取組を通して、母語以外でのコミュニケーションの機会をもち、これまで余り意識することのなかった外国への関心をもつことができた。交流校から送られるプレゼントやフラットスタンレー等は、文化の違いを直接感じる良い教材である。また、本校の生徒たちから、自分たちの活動を伝えるために、身近な地域のことを調べたり、伝え方を考えたりする学習活動であり、生徒の主体的な活動を促す良い学習の機会となっている。

また、取組の特色として挙げた【可視化】【日常化】【間接体験化】をふまえて、次のような具体的な効果を見とることができる。

交流活動を進める中で、例えばビデオチャットを通じて、実際に交流する相手の

表情やしぐさなどを見ながら会話するという体験を繰り返すことで、一度も会ったことのない姉妹校の生徒とすぐに簡単な会話をしたり、挨拶や呼びかけを気軽に行うことができたりする場面が多くなっている。交流していることを可視化することで、相手意識をもったコミュニケーションをとることができるようになっている。

また、会話している様子を周囲で見ている生徒たちが、自然に拍手したり手を振ったりすることもできるようになり、間接的な体験を通じて相互の心理的な距離感が少なくなり、交流活動全体を和やかな雰囲気で行うことができるようになっている。

国際交流に関する授業においても、いろいろな視点から物事を考えられる場面が増えるとともに、互いのよさに着目して発言したり、相手の立場に立って想像したりして、どう表現すれば相手にわかりやすく伝えることができるかを具体的に考えられるようになってきている。また、国際交流を特別視するのではなく、学校生活の中で日常的に関わっていくことができるものである、という見方が生徒に育ってきている。

これらのことは、生徒に物事を多面的に捉えることの重要性を認識させ、多様性を尊重する態度を養うことにつながるものであると考えられる。

○保護者や地域住民からの反応

取組について、校内に常設の掲示コーナーを設け、交流校からのプレゼントやビデオチャットなどの画像を掲示することで、保護者だけでなく、来校者にも交流の様子を周知している。概ね好評である。

○現在、実施に当たって課題と感じていること

ビデオチャット等による交流の申出が度々あるが、本校のカリキュラムの中で対応可能な時間帯・学級などの検討が必要である。できるだけ、直接やり取りができるチャットによる交流を実施したいが、申出が急な場合、応じられないことがある。また、遠距離のため直接交流の機会をもちにくいことも課題である。